

# 熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵 『幽斎様年中御祝之次第』について

徳岡 涼

\*キーワード

細川幽斎・年中行事・献立・吉書・仙翁花

はじめに

永青文庫に蔵される『幽斎様年中御祝之次第』(登録番号<sup>100</sup>, 12, 71)は、これまで紹介がなされていない年中行事の一書である。幽斎の有職故実と  
いうと、末柄豊<sup>1</sup>氏の「細川幽斎と武家故実」、さらには、細川家の有職  
故実に関係する書物を整理紹介した高濱州賀<sup>2</sup>子氏の『永青文庫叢書 故  
実武芸編』(吉川弘文館 二〇一四年)が、直接的なものとして挙げられ  
るくらいで、未紹介資料も多い。

本書は、幽斎自筆ではないということ、奥書などを伴っていないとい  
点からも、看過されてきたようである。しかし、その内容は、幽斎、三斎  
の時代の年中行事を記したものに間違いなく、室町末期から江戸初期にか  
けての細川家におけるその様相を伝える。副本が二本備わる(登録番号<sup>100</sup>,  
12, 72)(同・8, 6, 224)ことから、重要なものと見なされてきたこ

とがわかるが、(100, 12, 71)の登録番号を有する本が、最善本で、筆跡  
から竹原惟庸(元禄六年(一六九三)?)の筆とおぼしい。

一丁目の裏に、「○元朝」として「竹原玄可覚書之内ニあり」と朱筆で  
書き入れる。竹原玄可とは、幽斎の右筆の一人でもあり、『闕疑抄』『詠  
歌大概抄』の書写も許されている人物である。「竹原玄可覚書」とは、前  
掲著の中で、高濱氏が紹介された「竹原少左衛門覚書」(竹原家文書)に匹  
敵すると考えてみたが、当該箇所に対応する記載はない。ただ、幽斎が徳  
川家康に求められて献上したという『室町家式』(8, 1, 164)の奥書の中  
にも、「玄可老覚書」なるものが出てくる。この覚書が、『室町家式』の  
奥書に引かれることについての考察は、前掲末柄氏の論に詳しい。奥書に  
「(家康に)献上したあとで、室町家式一巻のほか、弓馬故実記一巻・故実  
記一巻の合わせて三巻のうち後の二冊の書名を高命集と改めたことが、竹  
原惟成(黒斎玄可)の覚書に見えている」という。転写本ながら『高命集』

(8, 6, 181)が伝来しており、弓馬故実と故実とが収められ「竹原玄可覚書」があつたことの証となる。この覚書に、元朝の所作について、何か言及することがあつたのであろう。

### 一、構成と成立時期について

当本は、「幽斎様年中御祝之目録」と「正月御奥にて御祝之目録」とから構成され、前者が、いわば細川家にとって公的な年中行事、後者が、奥向きの(家庭内での)正月十八日までの年中行事について記したものである。なお「御奥にて」催される年中行事は、七月十五日の盂蘭盆会のように公的な行事に併記されているところも見受けられる。全般的に行事次第というより、主に、何を供し、そして食したかという酒肴や献立について記されていることが一目瞭然で、ところどころ三斎、つまり忠興の折の献立についての言及もある。注目すべき記事について、考察しておきたい。

目録とは別に特記されるのが「○元朝」である。元且に人麻呂尊像を掛け、「古今和歌集」の序を読んだという。人麻呂尊像を掛けることについては、佐々木孝浩<sup>5)</sup>氏によつて説かれてきた人麻呂影供と呼ばれるものに関係する。もともと、白河院近臣として権勢を誇つた六条頭季が元永元年(一一一八)六月十六日、自身の邸宅六条東洞院で催した人麻呂像を掲げ、供物をし、歌会に及んだ事柄に端を発する。これが、後の古今伝受の折の設えに影響を与え、不可欠なものになった。天正二年(一五七四)六月十七日、十八日に、三条西実澄から幽斎が切り紙を伝受された座敷の設えを

記した「古今伝受座敷模様」(宮内庁書陵部蔵)という文書にも、人麻呂像が掲げられている様が記されている。時代は下るが、永青文庫にも『古今伝受の図』<sup>4)</sup>(212, 30)という後水尾院が、飛鳥井雅章に伝受した時の設えを鷹司兼熙が写した卷子が残され、床の間の人麻呂像が描かれる。このようなことを勘案すれば、細川家の年中行事に組み入れられた時期は、幽斎が三条西実澄に古今伝受を受け終え証明状を出された後、つまり天正四年(一五七六)より後と考えるのが自然であろう。

二次資料ながら『綿考輯録』<sup>5)</sup>を辿るに、天正六年以降に、元日試筆として、和歌あるいは発句を幽斎が詠んでいることとの関係が浮かび上がる。ただし、天正六年の『綿考輯録』(藤孝公)巻三の記事については、年記の異同がある。つまり「待れつゝさかむ日数をまつそ思ふはなの都の春をむかへて」並びに「立そゝふ去年にことしの春霞」は、それぞれ『衆妙集』や大阪天満宮文庫蔵本『連歌十九卷』『古連歌千三百』等においては、ともに文禄四年のものとするからである。『綿考輯録』編者小野武次郎は、その事を認めた上で、

此御試筆は年を越て、後に立春の節有年と奉存候、天正五年七月に閏月有て、六年は大寒中の越年也、正月四日此立春成へし、夫故待れつゝさかむ日数をまつそ思ふとの御詠御発句も、いまた節は冬の内なから年を越て今年の春か立らしとの御句歟

と述べる。正月四日に立春を迎えた(実際は年内立春である)天正六年こそが、この歌意と、発句とにふさわしいとみるのであるが、そもそも歌だけからは、試筆かどうかは判断できない。発句に関しては、「去年に」春

籠が立ったつまり、立春を迎えたといっていることから、『日本暦日便覧』で確認するに、十二月二十一日に立春を迎え、明けた天正六年、あるいは、文禄三年十二月二十八日に立春を迎え、翌々日に年が明けた文禄四年の試筆の可能性がある。天正七年には「あすと思ふ春やけふさへ朝籠」

(『玄旨公御連哥』(九州大学附属図書館細川文庫)には、「天六二日ニ立春の心を」という詞書きがあるが、これは正月二日が立春の、天正七年が正しい。三句目は「あさかゝみ」となっている)という発句がある。幽斎の試筆はこれ以降ほぼ継続していることが辿られ、定着している。元朝の項にある「吉書」が、試筆にそのまま相当するのか否かは慎重でありたいが、人麻呂像を掲げた前での儀式であるから、そこで認められる吉書とは、和歌、あるいは発句だったと推したい。

幽斎の元日試筆は、徳川家では謡初を行ったことを連想させる。例えば平野明夫氏が先行する研究をもとに諸史料での確認をされ、以下のように述べられた。

徳川氏の謡初は、元亀二年ごろに観世宗節父子が浜松へ来たことを契機として家康および家中に謡・能の愛好者が広がり、その後元亀三年正月二日にその鑑賞会が行なわれ、翌年、翌々年と行なわれているうちに年中行事化していった。元亀三年ごろに始まった謡の鑑賞会が、徐々に年中行事としての体裁を調べ、儀式として定着した。

その意義をこう説かれる。

謡初の意義のひとつとしては、徳川家臣団が一堂に会することに示されていよう。家臣団が一同に会することによって、家臣相互が家臣団

内での相対的位置を確認できる。それは座次であり、官途成・受領成などの披露に具現化される。通称改称の披露が儀式の構成要素であるのは、そのためである。そして、正月一日・二日の家康との対面が、個々に主従関係を確認する儀式であるのと一対をなす。

『綿考輯録』には右のような様相は描かれないものの、当本には、元日之御祝に、御相伴衆(御伽衆と同意である)、御小姓衆、さらには町人が会している様が、それぞれに供される差異のある酒肴とともに記され、正月八日には、出家衆、社家衆へも酒肴が振る舞われている。やはり、家臣団の結束のためには、必須行事であったのだろう。

更には、徳川家が、観世宗節父子との関わりから、謡を、徳川家を象徴する芸事としたように、細川家は、古今伝受を受けた家として、人麻呂像を掛け、古今集の序を詠むことを、家の象徴とし嘉例としたと思量される。『綿考輯録』には、細川家内部の年中行事は殆ど記されていない。天正十五年九月上旬、重陽の節句に、島津義久が在洛。幽斎に菊を送り、義久息女亀寿が秀吉の人質になった一件にこと寄せた歌の贈答程度である。あるいは『九州道の記』『東国陣道記』にも、端午や七夕に寄せた発句や和歌を載せるにとどまっている。

## 二、仙翁花について

当本に示される献立は、例えば孟蘭盆会の蓮葉飯、白黒赤の三色の亥の子餅等々興味は尽きないが、それらの検討は専門家に譲るとして、一点

取り上げておきたいのは「七月七日之御祝」の項の「仙翁花」についてである。この花については、芳澤勝弘<sup>9)</sup>氏が、中国から伝来したこと、室町期の一時期に栽培が進むこと、江戸期には記録類に殆ど見られなくなることなどを詳細に分析の上、七夕の花として定着していく様子をも辿られている。

文献上の初出は、『愚管記』（『後深心院閑白記』）の永和四年（一三七八）八月三日の条の次の記事だとされ、解説を付されている。

二条宰相来、有統哥興。披講之時分、日野大納言来、詠物名各一首。

せにをうくゑ、宰相書題。庭前有此花、今日賞之。近来出来花也。尤有興。愚詠如此。しつかすむ里のつゝきそかせにほうくゑかきにそふ梅の一木に。

「庭前有此花」とあるから、やはり庭で培養されていたのである。そして「近来出来花也」とあるから、このころ出始めたということになる。「尤有興」の三字に、当時の人のある種の新鮮な驚きのようなのを感じる。

更に、足利家の菩提寺である相国寺蔭涼軒塔主の公用日記『蔭涼軒日録』について、氏は、長祿三年（一四五九）から、文明十八年（一四八七）にかけての多くの記事を引用され解説されている。相国寺に、七月七日に向けて、仙翁花が、小補（横川景三）、喝食（東雲・春領・東川）、東福方丈、等持寺の陸首座等から仙翁花が贈られ、それは「包まれ」、足利義政、義尚に献じられている様子から、ここに七夕の花とする認識が確立されていたことがわかる。

仙翁花の記載の最後の記事は『蔭涼軒日録』に続く西笑承兌の『鹿苑日録』（一四九九〜一六〇三）の次の天正九年（一五八一）のものだという。

天正九年六月二十三日、嘉首座、夏菊教基・仙翁花一朵持ち来たる。凡眼を驚かす者なり。未だ人間に此の花の有るを知らず。

七月七日、嘉首座、仙翁花を持ち来たる。

そして、以下のような顛末を辿るとされる。

江戸に入ってから禅林の記録である『隔菴記』（一六三五〜一六六八）には、仙翁花の名はまったく見えない。著者の風林承章は諸芸道にくわしく、立花についてもしばしば記録しているのに、七夕前後であつても、この花のことはまったく記録に現れないのである。既に禅林ではこの花を贈答する風習はなくなり、わずかに公卿衆のなかで、七夕の行事として伝えられていたのであろう。

禅林の記録には途絶えているが、細川家では、七夕の花として膳を飾る。このことをどのように理解すれば良いのであろうか。

実は、この相国寺林光院には、幽斎妻麝香の甥である禅因こと潤英宗沼（一五六八〜一六〇二）が、住職として仕えていた。あるいは、鹿苑僧録の西笑は、幽斎弟、梅印元冲、及び玉甫紹琮の入寺を賀して疏を起草、幽斎自身とは和漢聯句会で同座しており、親密な関係にあった。<sup>10)</sup> 相国寺において仙翁花を飾物と見なしていた意識が細川家に伝わったのは必然であった。幽斎自身、足利義輝、義昭に仕えていたわけで、仙翁花は、その名残として年中行事に取り入れられたのかもしれない。

まとめにかえて

近時、戦国期の島津家の年中行事について、小瀬玄士<sup>11)</sup>氏が「島津家文書」所収の「年中行事等条々事書」を紹介され、島津家の史料と比較検討され、実態に迫る研究をされている。一月五日の「繩はしめ」（犬追物）など興味深いし、重陽の節句が記されていないことについては、その理由を考えてみたくなる。全般的に立ち後れている有職故実の研究は、各ジャンルの研究者が各々の知見を出し合うことで、新たな視界が開けるように思う。本紹介が、史資料の狭間を埋めるために活用されることを願いたい。

注記

- (1) 末柄豊「細川幽斎と有職故実」『戦塵の中の学芸 細川幽斎』森正人・鈴木元編(笠間書院 二〇一〇年)
- (2) 高濱州賀子「永青文庫所蔵の故実・武芸関係資料」『永青文庫叢書 故実武芸編』永青文庫研究センター編(吉川弘文館 二〇一三年)
- (3) 佐々木孝浩「歌会に人丸像を掛けること」『文学 隔月刊』6-4(二〇〇五年七月)
- (4) この図については、徳岡涼「永青文庫の『古今集』資料」森正人・鈴木元編『文学史の古今和歌集』(和泉書院 二〇〇七年)に紹介している。なお、幽斎自身の肖像画が人麻呂像を象っていることについて、三宅秀和「細川幽斎の肖像画」『季刊永青文庫』No.73(二〇一〇年冬)、森正人「細川幽斎の歌学と肖像」『公德』vol.19(二〇一〇年十一月)等がある。
- (5) 『綿考輯録』藤孝公 出水叢書(汲古書院 一九八八年)

(6) 土田将雄『続細川幽斎の研究』(笠間書院 一九九四年)に校合を載せる。

(7) 平野明夫「戦国・織豊期徳川氏の謡初」『戦国織豊期の社会と儀礼』二本謙一編(吉川弘文館 二〇〇六年)からの引用。同氏「戦国・織豊期における徳川家の年中行事」『戦国大名から將軍権力へ―転換期を歩く―』所理喜夫編(吉川弘文館 二〇〇〇年)も参照した。

(8) 例えば、江後迪子『歴史文化ライブラリー74 隠居大名の江戸暮らし 年中行事と食生活』(吉川弘文館 一九九九年)は、江戸後期の白杵稲葉藩の実態を分析している。

(9) 芳澤勝弘「仙翁花―室町文化の余光―として、氏の論はとりまどめて花園大学国際禅文化研究所のホームページ、(<http://iriz.hanazono.ac.jp/frame/>)でも公開されており、当該引用は、第2回「諸文献に出る仙翁花」、第6回「七夕の花」、第7回「仙翁花の贈答」、第11回「大乘院歌会での花かざり」第12回「江戸間で残る献上の風習」。初出は『季刊 禅文化』185号、186号(禅文化研究所、二〇〇二年)。

(10) この辺りの人間関係は、高濱州賀子「細川幽斎・三斎・忠利をめぐる禅宗文化」(一)『熊本県立美術館研究紀要』(第一号 一九八七年三月)、同氏「相国寺西笑承允と細川家―永青文庫蔵「帝鑑図屏風」賛の筆者について―」『熊本県立美術館研究紀要』(第二号 一八八八年三月)

(11) 小瀬玄士「島津家文書」所収「年中行事等条々事書」をめぐって『年中行事 神事仏事』近藤基郎編(竹林舎 二〇一三年)

附記・熊本大学附属図書館寄託財団法人永青文庫蔵『幽斎様年中御祝之次第』について、紹介ならびに翻刻をご許可下さいました財団法人永青文庫及び、熊本大学附属図書館に御礼を申し上げます。

書誌

○題簽 幽齋様年中御祝之次第

○登録番号 100, 12, 71

○江戸中期写

○法量・丁数 25・9×19・1糎 墨付き10丁(全11丁)

○表紙 茶色無地 なお、現在、後ろ表紙が欠落している。

○本書には「箆之相伝」とする覚書の一紙が挟まれているが、本体とは無関係である。

凡例

一、朱筆の部分は( )で表示した。献立の中の○は、朱であるが、( )は省略した。朱点も略した。

一、二行分ち書きの時には、一部「」を用いている。

一、原本に忠実に翻字したが、旧字体は、新字体に改めた。

一、一部、八・六・二二四の本文を用いたところがある。

○元朝(竹原玄可覚書之内ニあり)

一、幽齋様御代には御床に人丸の尊像をかけられ

御衣冠を被改拜を被成古今の序を御よみ被成

次に御吉書被遊候礼紙并御祝の物いわへ被付やう

古法の通り被成明方の年繩にさくけ置申候

次に御衣冠被改左之通御祝有之候由

幽齋様年中御祝之目録

正月元日之御祝

一、御相伴衆之分ハ御三方ニ御土器一ツ御とおりハ数の御土器御三方

三ヶ所ニ重て出すへし

一、御着御三方ニ杉原一重敷テ

○こぶ ○かち栗 ○のし「五寸程ニ切テ」○ところ ○ぬひ

○ふたはら ○かき ○かうし ○数の子

一、御番はつれかち之御小姓衆其外町人ニ被下のし台二ツニ載て

きらすにほときてたふくとのせ出すへし

同八日出家衆社家衆御礼之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居テ出すへし

一、御三方ニ数の御土器も出すへし

一、御着御三方ニ杉原一重敷テ

○こぶ ○かち栗 ○かき ○牛房

○数の子 三齋様数の子御出シ不被成也

同廿日御具足の御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居テ出すへし

一、御具足の餅御膳ニ付ク二ツの内上一ツちいさくかたく煮る

下一ツやはらかに小豆ニて煮る檜木二ツの足打あしからす

○数の子<sup>かはらけ餅</sup>九ツ 御餅

○ひらき大豆よきほと 三齋様ハひらきまめ御出シ不被成也

一、御銚子寒酒かさを取て

「1丁裏

「2丁表

一、御三方ニ杉原一重敷て

「 2丁裏

○のし ○こぶ ○かち栗

一、御具足の餅あかり候時分ハ朝御膳あかりて頓てあかる也

三月三日之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居て出すへし

一、御三方三ツ杉原一重敷てせきはんをつみて白箸添て可出

同茶碗鉢三ツにのしもみて入白箸添可然出家衆肴ハかうの物

切て鉢ニ入白箸添可出也

一、御肴御三方ニ杉原一重敷て桃の花柳にてかさり魚二種

精進一種積て白箸添可出御酒ハひやにてすゞに入桃の花

きさみて入て出へし

五月五日之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居て出すへし

一、御三方三ツニ杉原一重敷てちまきをつみて白箸添て可出

同のしもみて茶碗鉢三ツニ入何れも箸添て可出出家衆肴ハ

かうの物鉢ニ入箸添て出へし

一、御肴御三方ニ杉原一重敷蓮菖蒲をかさり魚二種精進物

一種以上三種積て白箸添可出御酒ハひやにて御すゞの中江も

菖蒲きさミ入出へし

六月朔日之御祝

一、御三方三ツ杉原一重敷て氷餅のし五寸程二切てつミませ

可出水餅なくハかき餅にてもよし何れも箸ハ不添

「 3丁裏

同土用之入ニ

一、大蒜ニシテウこまかにきさミ大白皿オニ入水少入ル小豆のよきをゑりて

よく洗是も大白皿ニ入御三方ニ居て箸添可出

三斎様ハのしも可出由被仰出也

同水無月之御祝

一、御三方ニ杉原一重敷て小麦餅をつミ白箸添て出すへし

一、茶碗鉢ニのしもみて入白箸添可出

一、瓜皮ながら輪二切て茶碗鉢に入出すへし御酒ハ不出也

七月七日之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居て出すへし

一、御肴御三方ニ杉原を敷て仙翁花を飾り魚二種精進一種

つみて白箸添て出へし

一、瓜染付の大鉢ニ入可出 御前にて切て被遣也のしもみて

鉢ニ入白箸添て出すへし

同十五日之御祝

一、御三方ニ杉原一重敷はすの御飯蓮の葉に包チカヤ茅を根引

にして杉原ニて巻て十文字に結御三方ニのせて白はし

添て可出

一、御三方ニ鯖二さし蓮の葉に包上をむしりて右の茅

にて一文字に結御三方ニ乗て白箸添出へし

一、出家衆肴ハかうの物御次方別ニ可出

一、御次ニハ御三方二ツニ蓮の食のせて白箸添可出包様右ニ同

「 4丁裏

一、大鉢一ツニ鯖をちいさくむしりて箸添て可出又ちいさき鉢ニかうの物切て箸添て可出

同日之御祝御奥にて参候時ハ

一、御三方ニ御土器一ツ居て出へし御酒すゞにて出すへし

一、蓮の御食の上に鯖を乗て包様右二同

一、御肴魚二種精進一種御三方ニ杉原一重敷組付白箸添て出すへし

八月朔日之御祝

一、御三方ニ土器一ツ居て出すへし

一、御三方ニ杉原一重敷強飯をつミ白箸添出すへし

一、茶碗鉢にのしもミて箸添可出家衆ハ肴ハかうの物

可出

一、御肴御三方ニ杉原敷魚二種精進一種白箸添出すへし

一、御次候ハ御三方ニツニ杉原敷強飯を積白箸添可出

一、茶碗鉢にのしもミて箸添可出

八月十五日名月之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居へ可出御酒ハ錫ニ入

一、御肴御三方ニ杉原敷魚一種精進一種合二種箸添可出

一、御三方ニ杉原一重敷芋一口茄子のし五寸程二切つミ合

箸添可出

九月九日之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居可出

「5丁表

一、御三方ニツニ杉原一重敷せきはんをつみて可出白箸添茶碗鉢ニツニのしもミて箸添可出家衆肴ハかうの物可出

一、御肴御三方ニ杉原一重敷菊をかさりて魚二種精進一種箸添可出御酒御錫ニて菊をきさミて入出すへし

九月十三日名月之御祝

一、御三方ニ御土器一ツ居可出

一、御三方ニ杉原一重敷枝大豆たふ／＼とつミ一口茄子のし

五寸程二切て三色置合可出のしハ御前之方ニ置也

一、御肴御三方ニ杉原一重敷魚一種精進一種置合箸そへ

可出御酒ハひや錫にて出すへし

十月いこの御祝

一、御三方ニ御土器一ツ可出

一、御三方ニツニ杉原一重敷敷御シヅメ重を入可出白黒赤三色

御茶碗鉢ニツニのしもミて何れも白箸添可出

一、御肴御三方ニ杉原一重敷菊紅葉をかさりて魚二種精進

一種つミ白箸添可出

已上

御年越之御祝「御あしうち／御はしほそし」

鮎なますのすし 小鯛 御汁な

なます

かうの物 いわし二疋 御めし

二

「6丁表

「6丁裏



塩かい切て

御汁「鳥か／魚か」

大魚<sup>生</sup>

正月御奥にて御祝之目録

元日之御祝之次第

一、大ぶく茶 御菓子

一、御三方ニ  
○梅干 御土器ニ入

○数の子同

○のし 廿本

○かちくり 三十

○こぶ 三十

一番

「7丁表

殿様御前大足打ニのる

○のし 五ツ うらしろしく

一、御引渡

○かちくり五ツ

○こぶ 五ツ

二番

一、御三方ニ御盃一ツ

○むすひこぶ 三

○もちニツ上下

一、御ざうに ○いもかしら一ツ大キ

○大こんニツ

○するめ 三

○たうふ 三

○子いも 三

○はなひら一ツ  
中ニすハる

○ひし一ツ

○かすの子  
かはらけに入  
○ひらきまめ

一、御肴御三方ニ杉原一重敷て

○こぶ ○かちくり ○のし 五寸二切

○あひ ○かうじ ○ところ

○ふたはら ○かき ○かすのこ

三番

一、御三方ニ御盃

一、御吸物鯛三切 「御吸物の御膳ニも如常の白はしすへ／出すへし」

一、御肴まへのごとく

右御祝之後

一、御三方ニ盃

一、御めし本ニ御汁一ツ御さい五ツ

○塩鯛一ツそのまゝ生にて ○いわしニツ生にて 「8丁表

○かうの物

○なます

○何ニてもすし

一、二の御汁一ツ御さいニツ

○何ニても大成魚きりめ

一、御肴前のごとく

○やきとり

一、御三方ニ御菓子三種

○みかん

何も三日之分御祝同但二日御朝食の内に大蒜御三方に

「7丁裏

居御土器ニねりミそ入テ可出又御からミも二日の御朝食の  
後御祝シニク大蒜

御人数程出スへし 「8丁裏

一、御三方ニ御さかつき

御かゝミかさり様

一、御かゝミ一重 ○赤はなひら三 ○白花ひら三

○赤大ひし 三 ○白大ひし三

上置

○ごふ五 ところ かちくり ふたはら三わけ

○のし二本 杉原ニて包水引手結 上ニ四 ○いわし二 ねのひの松 ○くしかき一くし

杉原ニて包水引ニテ結 ○山たち花二本 ○かうし一ツ ○かや五ツ ○たいく一ツ

○うらしろ 「二またなるを三ツしく」 「9丁表

一、御肴まへのごとく

此内ニ御家中女房衆御礼也初ハ御三方ニ御盃一ツ居ル

後ハ数の御さかつき也

同七日之御祝

一、御引渡まへのごとくへ

一、御三方ニ御盃

一、御ミそうぶ ○もち二 ○はなひら一ツ ○かすのこ

○上置七くさ 中ニすわる ○ひらきまめ

○ひしもち一ツ

一、御さかつき

一、御食まへのごとく

一、御肴まへのごとく

一、御くわしまへのごとく 「9丁裏

同十五日之御祝

一、御引渡まへのごとく

一、御三方ニ御さかつき

はなひら一ツ

一、あづきの御粥餅二ツ

中ニすはる

一、御肴まへのごとく

一、さきつちやうにてふこらかしたるひし花ひら御三方ニ居

のし十本程そへ御粥すハる内ニ出すへし

一、御三方ニ御さかつき

一、御食まへのごとく 十五日之晩ニハかうの物の代ニくきつけの

高もり也

一、御肴まへのごとく 晩ニハ御さかな御三方ニ御土器居かすの子

斗置白箸添可出 「10丁表

同十八日之御祝

一、御三方ニ御さかつき

一、十五日之御粥をあたくめ可出

一、御肴御三方ニ

○かすのこ御かわらけ二入 ○ひらきまめ ○ごふ

〇かきす

巳上

(白紙)

〇〇〇

「10丁裏